

# B-35 衣料用皮革のクリーニングによる性状の変化

昭和女大 岡村 浩, 埼玉県工業試 〇白山琢持

目的 革衣料は、わが国においても最近、その普及がめざましく、これにともなって革の洗たく、保存、手入れの技術に関する基礎的研究の必要性が増大している。革衣料の洗たくに関連する主な問題点を見ると、クリーニング抵抗性の染料および染色法の選定、クリーニングにおける媒体、洗淨助剤、温度、時間、装置などのクリーニング条件、革の洗淨効果とその性状変化との関係、クリーニング過程における皮革中の加脂剤の挙動などがある。そこでクリーニング条件が衣料革にどのように影響をおよぼすかを明らかにした。

方法 市販衣料革、すなわちカーフスキン、ゴートスキン、シープスキン各1点、鞣革7点の合計10点を試料とし、(1)0.5%オレイン酸ナトリウム水溶液、(2)0.5%ドデシルベンゼンスルホン酸ナトリウム水溶液、(3)市販ドライソープを1% $\frac{1}{100ml}$ 添加したパークコルエチレン、(4)ニッサンソルノンSP1% $\frac{1}{100ml}$ 添加したガソリンを使用して、JIS L0821-1965による染色堅ろう度試験用洗たく試験機によるクリーニング試験を行った。カラーメーターによる色度の測定および変退色用グレースケールを用いる色調の変化、JIS K 6550による革の機械的性質、~~硬度~~度、吸水度および湿潤度を測定した。

結果 ウェットクリーニングを行うと革が硬くなるが、特に洗剤としてオレイン酸ナトリウムを使用した場合にこの傾向が著しい。ドデシルベンゼンスルホン酸ナトリウムを使用すると革の硬化は比較的少ないが、染色堅ろう度の低下が最も著しい。ドライクリーニングは一般に染色堅ろう度、革の柔軟度におよぼす影響は少ないが、革の伸び、引裂強さが減少し吸水度は増加した。鞣革は一般に耐洗たく性は低かった。